

性とセクシャリティの
とりどり
に寄せて
にじいろBiwako

12. 連載を振り返って

NPO法人にじいろBiwako 代表理事 橋本 竜二



早いもので、一年に及んだ連載が終わろうとしています。これまでスタッフがリレー形式で、さまざまなテーマに基づいて、性の多様性やLGBTQ+について語ってきました。読者の皆さまにとって身近に感じていただけるテーマはありましたか？もしそうなら、ぜひこれからも楽しみつつ性の多様性について、私たちと一緒に考えてもらえると嬉しいです。

よく聞く話に「新しい車を購入すると、街で同じ車をよく見かけるようになった」というものがあります。それはLGBTQ+だけでなく、社会的マイノリティ全般においても同じことが言えると思います。これまで何も気に留めていなかった物事が、あるとき身近

“身近になることで見えはじめる世界”

になったら、見えていなかった世界が急に見え始める、そんな経験をされた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

高校時代の友人に自分はゲイだとカミングアウトした後、その友人から「見た目が男性の人ふたりが仲良さそうにしていると、もしかしてゲイなのかな？」と思うようになった」と言われ、極端すぎやわ、と大笑いしながらも心の中では「ありがとう」の気持ちでいっぱいになりました。

連載を通じて、このテーマがひとりでも多くの人にとって身近なものになっていたら、こんなに嬉しいことはありません。私は男性で生まれて男性の自認を持ち、それでいて男性が好きという性のあり方で、「なんやかんや社会と折り合いをつけながら」生きてきました。そう遠くない将来、「社会と折り合いをつける必要がない」生き方ができるようになっていくと思います。そうしていくためにもここ滋賀で、「にじいろBiwako」は活動を続けていきます。最後まで読んでいただき、ありがとうございました。（終わり）

